



実際の古墳の様子 ←

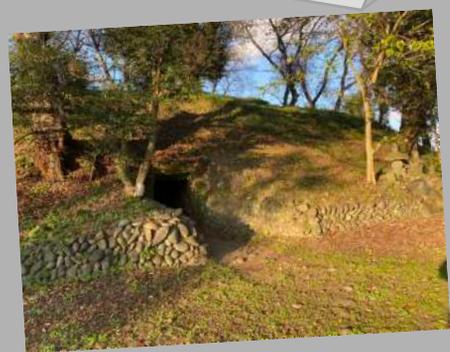
八幡観音塚古墳は、群馬県高崎市八幡町に位置する国指定史跡です。

尾崎喜左雄先生が1960年に直接測量調査を手掛けました。

6世紀末から7世紀初頭に築造された、群馬県域では最後の前方後円墳だと考えられており、その全長は105メートルに及びます。

— 実際に行ってみて —

古墳自体に登れると思っていたので感動しました。昼間でも石室の中は暗く、暗闇の中では入り口さえ目立たなそうです。また玄室内の空気は外より涼しく感じました。意外と広かったです。千年以上の月日経っても崩れない、頑丈な石室をどのようにして作り上げたのか非常に興味が湧きました。



石室を外から見た様子 ←

やわたかんのんづかこぶん
八幡観音塚古墳の概要



玄室に続く羨道の様子 ↑

石室の奥行きは全長15.3メートル、うち玄室の長さ7.14メートル、奥室の幅は3.42メートルです。石室を構築する自然石は最大55トンにも達することから、見るものを圧倒する「群馬の石舞台」と称され人々に親しまれています。こうした巨石を用いた横穴式石室は畿内からの技術の導入を示しています。

《番外編》古墳を見つけた経緯とは...？

1945年3月10日、当時八幡観音塚古墳の後円部に防空壕を掘っていた近隣住民により石室の入り口が発見されたそうです。突然目の前に現れた巨大な空間と豪華な副葬品に人々は驚嘆しました。この偶然の発見が、今日の私たちに大きな遺産をもたらしてくれました。ここから出土された副葬品は古墳時代当時の文化・技術の最高水準を示しています。